

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ かいせつ
展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

ね ごろ めり
根来塗
シンプル、強い、美しい。
—古くて丈夫な朱漆器のお話—

木製品に黒漆を塗り、さらに朱漆を重ねたものを根来または根来塗といいます(図1、図2)。けれども黒漆に朱漆ならなんでも根来塗というわけにはいかない微妙な言葉です。今回はそんな根来塗についてのお話です。

名の由来は和歌山県にある根来寺です。大勢のお坊さんがつどう大寺院でした。中世の大寺院には、生活用品をつくる専属の職人が集まるものでしたから、根来寺にも食器、家具、仏具などをつくる人たちがいました。木を加工する木地師や漆を塗る塗師です。彼らがつくる漆器は、さっぱりとした形で、丈夫で、どうやら朱漆塗でした。これが有名になり、上等な朱漆塗の器を「根来」と呼ぶようになったらしいのですが、じつはこのお寺、あまりに大きく強かったので、豊臣秀吉に警戒され、天正13年(1585)にことごとく焼き滅ぼされてしまいます。そして困ったことに、根来寺が焼きうちにあう前に、上等な朱漆塗の器を「根来」と呼んだ証拠は、今のところどこにも見あたりません。根来寺は慶長5年(1600)に徳川家康の許しを得て、復興の道を歩みます。

最近の発掘調査で、根来寺から朱漆塗の器が出土し、焼きうち前にこの地に漆器があったことは確認できました。が、朱漆器は根来寺以外でもつくられたので、これだけで「上等の朱漆器 = 根来」の証拠とはいえません。そこでむかしの書物に証拠を探してみよう。

江戸時代初期、寛永15年(1638)の『鷹築波集』という書物に「根来の坊さんは折敷(縁つきのお盆)をまるごと朱色で塗る」という中世の歌の文句が出てくるそうです。また、正保2年(1645)、『毛吹草』という本は、今の和歌山県の名物として「根来 椀 折敷」を取りあげています。説明には「むかし、根来寺が栄えていた時につくった道具という。当時はあちこちでこれを売買した。」とあるので、この時代にはもう根来寺で漆器はつく

られていないこと、それにもかかわらず有名だったことがわかります。

江戸時代中期、元禄7年(1694)の『万宝全書』には、「根来物」として登場します。同じころ、正徳2年(1712)の

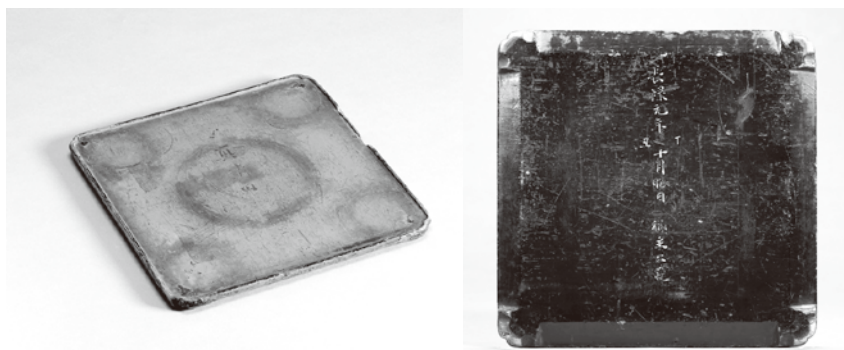
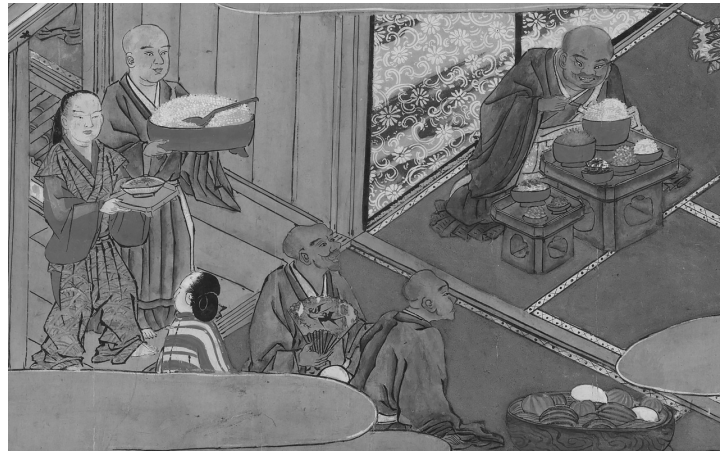


図1、図2 長禄元年(1457)の銘文のある朱漆塗折敷(重要文化財 真清田神社蔵)

百科事典『和漢三才図会』も、^{わ かんさんさい ず え} 椀^{わん}の代表的産地に^{ね ころ}根来をあげ、ほかの産地に比べて「^{ね ころ}根来の^{わん}椀が最もよい、今はもうつくられていない」としてあります。ほかに「親の代の^{ね ころ}根来のものにも劣らないくらいの、布で補強して上等な下地を塗った漆器」(元文3年(1738)『御伽名題紙衣』)という表現もあり、「^{ね ころもの}根来物」の評判はよかったです。



参考 室町時代の偉いお坊さんが朱漆器で食事をする図(『酒飯論絵巻』部分 文化庁)

江戸時代後期にも「^{ね ころ}根来椀」を紹介し、かつて^{ね ころ}根来寺の施設やまわりの村、^{にしきかもと}西坂本などで^{しゅぬり わん おしき}朱塗の椀・折敷をつくったと述べる本(文化8年(1811)『^{きいのくにめいしよ ず え}紀伊国名所図会』)があり、江戸時代を通じて、むかしにつくられた丈夫な朱漆器、とくに椀・折敷を、^{ね ころ}根来寺に関連づけていたことがわかります。

つまり、^{ね ころ}根来寺で朱漆器がつくられていたころ、それを「^{ね ころ}根来」「^{ね ころもの}根来物」と呼んだ証拠はないけれども、江戸時代を通じて、むかしの丈夫な朱漆器を「^{ね ころ}根来」「^{ね ころもの}根来物」「^{ね ころ}根来椀」などと呼ぶ習慣が培われたようすが窺えるのです。

これに「^{ね ころ}根来塗」という名前を与えたのは、明治11年(1878)、外国に対して日本の工芸の歴史を紹介する機会にまとめられた『^{こうげい しりょう}工芸志料』という本でした。黒川真頼と熊沢有義という研究者が各地の漆器について報告するなかで、^{ね ころ}根来の漆芸をそう呼びました。その後、昭和30年代(1955～64ごろ)に^{ね ころ}根来塗を集めることや、あれこれ評価することが流行り、^{ね ころ}根来塗のイメージが定着します。



図3 朱漆塗高杯 14世紀 京都国立博物館蔵

では、実際にどんな朱漆器を現在、^{ね ころ}根来、^{ね ころぬり}根来塗と呼んでいるのでしょうか。くわしくは展示室でじっくり確認していただくとして、ここでは簡単に説明します。古くて丈夫な朱塗が条件ですから、江戸時代よりも前の作と推定される古風な木製の道具、とくに飲食器や仏具を中心とした漆器で、表面の朱漆塗が長年の使用によって摩耗し(擦れてはげている)、そこから中塗りの黒漆が見えるような姿が基本です。神前や仏前のお供えにもちいられた食器(図1、2、3)が多く、寺院で使われた器は、どことなく中国風の姿をしているものもあります。

シンプルで力強い形、たっぷりと塗られた漆の艶、古来、神聖視されてきた朱の鮮やかさ、過ぎ去った時を感じさせる朱漆の摩耗、その下に見える黒漆とのコントラスト・・・なんの予備知識がなくても見たとおりに鑑賞できる説得力のある美しさが、数百年にわたって愛されてきた^{ね ころぬり}根来塗の魅力なのでしょうね。

こうげいしつ ながしまめい こ
(工芸室 永島明子)